

## 御霊にある自由 ガラテヤ 5:13-18

1. 「兄弟たち。あなたがたは自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。（ガラテヤ 5:13）」
  - a. 自由の追求というテーマは神からの召しであり、アメリカにおいても最大のマーケティングツールとなっている。しかし本当の自由は主によってのみ得られる。
  - b. ここで使われている自由とは、クリスチャンを律法主義におとし入れようとする偽教師と戦うための手段のことである。聖書は神のを知るための最適のツールではあるが、神に置き換えようとする時私たちは奴隷のように束縛される。
  - c. 自由とは私たちが好き勝手に生きるということではなく、神や他の人に対し律法的な制約が取り除かれ無制限に愛し仕えることができる、ということである。
2. 「律法の全体は、『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という一語をもって全うされるのです。（ガラテヤ 5:14）」
  - a. ギリシャ語では「愛せよ」は「アガペセイス」と、いう言葉で、基となる言葉は皆さんご存知の「アガペー」であり、「完全な愛」「神の愛」という意味である。律法を全うすることを一言で言う「愛」である。
  - b. 完全な愛とは献身的に他の人を自分よりも先に置くことである。律法主義のほうが魅力的に見える理由の一つは、ルールに従う方が自発的に愛するよりも楽だからである。
  - c. イエス様は愛の形の完璧な見本である。イエス様は完全な愛に生きたので律法を全うした。
3. 「もし互いにかみ合ったり、食い合ったりしているなら、お互いの間で滅ばされてしまいます。気をつけなさい。（ガラテヤ 5:15）」
  - a. 私心のない愛の反対は利己的な愛。愛を見失った者はその行動に表れる。それがもたらす結果はパウロが 19-21 節に記述している。
  - b. ここで表現されているのは、羊がかみ合ったり、野生動物が生き残るために攻撃したり、強い動物が獲物を求めたり、悪いものに感染した人が他の人をむしばんだり、というイメージだが、要するに自己中心的な行動というのは崩壊をもたらし、神の国の相続権を失うことになる、ということである。
4. 「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。（ガラテヤ 5:16）」
  - a. 歩みとは日々継続していくこと。御霊によって歩む結果は 22-23 節に述べられている。
  - b. 御霊によって歩むことは神から与えられた自由の中で道を選択していくこと。自己中心的な愛よりも自己犠牲的な愛を選んでいくこと。愛の実践によって神の性質を共有していく。
  - c. 御霊によって歩むと肉の欲はなくなっていく。
5. 「なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。（ガラテヤ 5:17）」
  - a. 御霊によって歩むのが難しい最大の理由は、肉の願うことはそれに逆らうからである。御霊によって歩むことは迫害を伴う。
  - b. 御霊によって歩むことによって迫害を受ける時、私たちの希望はこの世にあるのではなくこれから来るものであるということを理解することが大切。私たちの希望は復活にある。
  - c. イエス様は御霊によって歩むことの完璧な見本である。イエス様はこの世のいのちの後に永遠のいのちがあることを示してくださった。私たちが御霊による歩みにこの自由を使うなら、迫害の中にあっても神の国を受け継ぐことができる。